爽風エッセイ

教育でウェルビーイングを！

――前田　晴雄

ウェルビーイング（well-being）という言葉が人口に膾炙している。教育界においては経済協力開発機構（OECD）が定義した「生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的・認知的・社会的・身体的な働き（functioning）と潜在能力（capabilities）」（「PISA2015調査国際結果報告書」）との意味で用いられ、中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」（令和3年1月26日）等においても言及されており、重要なキーワードとなっている。

全日本教職員連盟としても、教育に携わる我々こそ子供たちのウェルビーイングを実現させる主体であると考え、その実現を最上位目標として活動を展開している。

しかしながら、ウェルビーイングの実現、つまり幸福実現のために教育を行うことは当たり前であるのに、なぜ今あらためてウェルビーイングの重要性が指摘されているのか。これは社会環境の変化によって、幸せの定義及び必要な能力等が変化し、これまでの教育ではウェルビーイングの実現が困難になっているからに他ならない。

それでは、ウェルビーイングの実現のため教育はどう変わるべきなのであろうか。そのキーワードは「個別最適な学び」と「協働的な学び」である。これも中教審答申で示された言葉であるが、この言葉がこれから教育変革を進める上での鍵となると考えている。

これまでの教育は、同じ年齢集団が同じ教室で同じ内容の知識をいかに効率よく学ぶかということに主眼が置かれていた。結果的にはこれがいわゆる事実的知識をより効率的に身に付けることができる最も有効な手段であり、幸せへの近道だったのである。しかし、社会が多様化するとともに価値も多様化し、正解がない社会の中では、事実的知識さえも揺らいでいる。さらに社会の多様性は同時に子供の多様化を生み、子供の関心・意欲や特性等は千差万別である。このような状況の中で、それぞれにあった学びを、我々がコーディネートすることや、自らデザインして学ぶことができる力を育成することが重要となる。これが「個別最適な学び」である。

そしてもう一つが「協働的な学び」である。「個別最適な学び」によって身に付けた知識を、経験と結び付け概念的な知識へと進化させることや、他者の知識と比較・考量した上で価値判断・意思決定する等の学びである。また学校という小さな社会において、共に学び、時にぶつかりつつも折り合いをつけたり、お互いの良さに気付いたりすることができる力も、この「協働的な学び」によって身に付けることができる。さらに、この「協働的な学び」は、自己実現や成長、更には他者への理解や感謝といった、心情的な面で幸せを感じることができるため、よりウェルビーイングの実現にとって重要な学びとなる。

一人一人に応じた学びを見極め、場や方法を提供すること、そしてそれぞれの学びで得た知識等を用いて、協働的に学ぶ場面や到達目標等を設定すること。これらにより子供一人一人の多様な幸せ、ウェルビーイングを実現するための力の育成につなげることが、我々に課せられた使命であることを自覚し、これからも全力で教育に携わっていく。

（全日本教職員連盟委員長）